

博士論文概要

高句麗の史的展開過程と東アジア

井上直樹

【概要】序論 高句麗史研究の意義と課題

紀元前一世紀から六六八年まで、おおよそ中華人民共和国（以下、中国）東北地方から朝鮮半島中南部にかけての地域を主たる領域とした高句麗は、帝国日本の朝鮮・満洲への勢力拡大という当該期の現実的課題と関わって、帝国日本の軍人・東洋史学者、はては政治家までにも大いに注目され、研究が進められていった。

一九四五年の帝国日本の崩壊後、かつての高句麗故地は、中国・朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）・大韓民国（以下、韓国）となり、これら諸国の学者によって自民族・自国史を前提とした歴史観が声高に叫ばれるようになる。高句麗史研究は歴史論争の場へと変容していった。

こうした状況下にあつてより重要なのは、近代以後の枠組から離れ、高句麗の史的展開過程そのものを、当該期の高句麗を取り巻く諸情勢を勘案しつつ、高句麗史の観点から論究するという、高句麗史研究上の基礎的作業であろう。

しかし、戦後日本において、こうした観点からその史的動向を総合的に論じたものは、武田幸男『高句麗史と東アジア』、『広開土王碑』研究序説』（岩波書店、一九八九年）のみである。ただし、同書はそのタイトルが示すように『広開土王碑』研究を第一としており、『広開土王碑』以外の時期の高句麗の史的展開過程などについては必ずしも詳細に論及されているわけではない。高句麗は中国諸王朝や朝鮮半島で勃興した百済・新羅だけでなく、その南方にあつた倭（日本）とも密接な関係を有しており、それだけに、高句麗とそれら諸国との関係などを総合的に討究する必要がある。

そこで、第一部「高句麗史研究の動向と課題」、第二部「四〇―六世紀初の高句麗の対外関係と東アジア」、第三部「東アジアにおける高句麗と中国王朝」、第四部「高句麗の対倭外交と東アジア」において、高句麗の史的動向を高句麗と中国諸王朝、さらには百済・新羅・倭（日本）との関係をふまえて高句麗史の観点から追究し、東アジア的視座からその史的展開過程の解明を試みた。

第一部 高句麗史研究の動向と課題

第一章 戦後日本の高句麗史研究の動向と課題

はじめに

ここでは戦後日本で高句麗史研究がどのように進展していったのかを整理し、高句

麗史研究の現状と課題を把握することにした。

一、一九四五年―一九六〇年代の高句麗史研究

一九四五年の日本の敗北と満洲国の崩壊・植民地朝鮮の解放による研究環境の急激な変化などによって、高句麗史研究は低調であった。ところが、七〇年代以後、『広開土王碑』に対する関心の高まりによって状況は変化する。

二、転換点としての一九七〇―八〇年代―戦後日本の『広開土王碑』研究―

（一）『広開土王碑』の原碑字をめぐる研究状況

日本における『広開土王碑』研究、高句麗史研究を転換させる契機となったのが、朴時亨『広開土王陵碑』（社会科学学院、一九六七年）が公表されたことであった。これによって大和朝廷の「南鮮支配」の根拠が否定され、既往の解釈の再検討を迫られたためである。さらに軍部による『広開土王碑』の拓本（墨水廓填本）解説・研究への批判的検証の必要性が高唱されたことも軽視できない要因であった。これによって近代日本における『広開土王碑』研究の性格の一端があらわになったが、こうしたなか、『広開土王碑』研究により大きな波紋を投げかけたのが、軍部によって碑字が改ざんされたという李進熙の一連の論考であった。この『広開土王碑』改ざん説に対しては、賛否両論さまざまな見解が提出され、その過程で原石拓本や中国での墨水廓填本（潘祖蔭旧藏本）が見見されるなど、研究の基盤が整理された。以下、この『広開土王碑』の解釈をめぐる研究状況

一方、日本では辛卯年条を中心に議論が行われ、碑文の構造から辛卯年条が広開土王の征討を正当化するための前置き文であることなどが明らかにされ、七〇年代より議論されてきた辛卯年条の解釈については一応の決着をみることもなった。また、『広開土王碑』の倭が広開土王の偉大さを引き立てるためのもので、そこから倭の歴史的事態を解明することは困難である、などの重要な提言も行われた。

三、一九七〇年代以後の高句麗史研究の成果と課題

このように七〇年代以後、『広開土王碑』研究は活況を呈していたが、それ以外に、『牟婁婁墓誌』や徳興里古墳の墨書、『中原高句麗碑』（近年、韓国では、『中原高句麗碑』を『忠州高句麗碑』と呼称するようになったが、ここではこれまでの慣例上、『中原高句麗碑』とする）、『集安高句麗碑』など金石資料に関する研究も積極的に進められ、高句麗史研究は進展していった。

一方、『高麗記』の史料性格の解明、高句麗史研究の基礎資料となる『三国史記』

高句麗本紀（以下、『三国史記』は省略、高句麗本紀は麗紀とする）についての批判的検討も進められ、あわせて麗紀の高句麗王系に対する考察も行われた、高句麗史研究の基礎的基盤も整備されていった。

高句麗史研究の課題―結びにかえて―

このように戦後日本の高句麗史研究は、一九七〇年代の近代日本の朝鮮史学の特質に対する批判や軍部による『広開土王碑』の改ざん説を一つの契機として、『広開土王碑』研究、特に倭関係記事について著しい成果をあげてきた。これは『広開土王碑』にみえる倭の動向が、日本においてきわめて重視されていたためでもあった。

しかし、同時にこのような日本の研究は、『広開土王碑』を高句麗の同時代史料として考究しようとする視角が、ほとんどなかったことを露呈することにもなった。『広開土王碑』関連書籍が多数刊行されたのに対して、それを高句麗史に位置づけ論究したのが武田幸男『高句麗史と東アジア』（前掲書）のみであったことは、そのことを端的に示しているといえる。

第二章 中国・韓国の高句麗史帰属問題と研究動向

はじめに

二〇〇三年、中国と韓国・北朝鮮との間で高句麗史をそれぞれ自国史の一部とみなす高句麗史「争奪戦」が勃発した。ところが、この問題はそれ以前から存在しており、それは中国における高句麗史研究の歩みとも密接に関わっていた。そこで、中国における高句麗史帰属をめぐる議論を整理した上で、韓国の研究情況などにも論及し、この議論を考究する上での端緒としたい。

一．一九八〇年以前の高句麗帰属問題

(一) 一九四〇年代の高句麗史研究

中国でもっとも早く高句麗の帰属問題に言及したのは、「東北史研究の開拓者」とされる金毓黻である。彼は日本の「牽強附会な研究」に対して、『東北通史』を著し、遼寧省・吉林省・遼寧省・熱河省に該当する「東北史」が、「中国史」の一部であることを強調し、高句麗が中華民族の一つであったことを強調したのである。このように高句麗史の帰属問題は日本の学者と中国の学者での「歴史争奪戦」を前提に議論されたのである。高句麗帰属問題は政治的課題に即した重要課題であったのである。

(二) 文革～解放・改革以前の高句麗史研究

一九四九年の中華人民共和国の成立から七〇年代まで、第一に、文化大革命によって高句麗史研究が停滞したため、第二に、中国は「抗美援朝」政策をとり、北朝鮮との間で摩擦を起こしかねない高句麗史帰属問題に関する研究が行われなかったため、第三に、マルクス主義によって中国の歴史を解釈することが優先され、高句麗史が重要視されなかったため、中国における高句麗史帰属問題に関する研究は停滞した。そのため、当該期の中国では日本やソ連の研究を参照に、高句麗史は「朝鮮史」の一部とされたのであった。

二．一九八〇年から東北工程までの高句麗史研究

(一) 一九八〇年代の高句麗史研究

文革終了後の一九八一年五月、北京で「中国民族関係史研究学術座談会」が開催され、歴史伝統境域内の民族は中国民族に属することが中国の研究者の間で「共通した認識」となると、高句麗史が中国史に帰属するという議論が展開されていくようになり、隋・唐の高句麗遠征も統一多民族国家形成の一つの「統一戦争」とされ、高句麗は中国の地方政権として位置づけられていったのであった。

(二) 一九九〇年から東北工程までの高句麗史研究

こうしたなか、高句麗文化国際学術討論会（一九九三年八月）で、北朝鮮の朴時亨が公然とこうした中国の高句麗史認識への批判を述べ、中朝間の高句麗史認識の相違が白日の下に晒された。この会議に出席した孫進己は韓国の研究者も同様な見解であるとした上で、高句麗を「朝鮮史」とする史観を中国を「侵略のための史学」と断じ、このような「反動的侵略史学」に反駁する必要があると高唱したのであった。こうした中国ではこうした「反動侵略史学」の「挑戦」に対抗すべく、九〇年代以後、高句麗史研究所や学術会議を通して、より組織的に研究が進められたのであった。

三．東北工程と高句麗史研究および韓国・北朝鮮の近年の研究動向

(一) 東北工程と高句麗史研究

東北工程とは「東北边疆歴史与現状系列研究工程」の略称で、中国社会科学院と東北三省が共同で行う大型研究プロジェクトである。これは東北史研究が北朝鮮や韓国の研究者の「挑戦に直面」している現状をふまえ、二〇〇二年二月から五年間計画で始動したものである。これによって中国社会科学院を中心により組織的な研究が行われ、関連学中間会議が頻繁に開催され、組織的な研究の進展によって高句麗は「中国史」の一部とする見解が強調されていったのである。

(二) 東北工程に対する韓国・北朝鮮の対応と研究状況

これに対して韓国では、二〇〇三年後半以後、歴史学会、マスコミ、市民団体によつて中国の歴史認識に対する批判が行われ、「中国の高句麗史歪曲対策学術会議」(二〇〇三年二月)で、韓国古代史学会ほか一七の歴史学会共同で「中国は高句麗史に対する歪曲を即刻中断せよ」という声明文が発表され、あわせてそれに対抗するために高句麗史をはじめとする研究センターの設立が求められた。

こうしたなか、高句麗研究財団が発足し(二〇〇四年三月)、組織的な高句麗史研究基盤が整備されるとともに、中韓両政府によつてこの問題の拡大防止も議論された。こうしたこともあつて、東北工程に端を発したこの「戦争」は次第に収束し、東北工程関連サイトも大幅に削減され、東北工程はひっそりと終了した。

高句麗史の帰属をめぐる問題は、近代国民国家的歴史観をどのように克服していくかということとも関わるものであり、それだけに近代歴史学全体の課題として継続して議論され続けなければならない。一方で、こうした帰属をめぐる論争をふまえて、論究すべきは、第一に、高句麗史を近代的枠組から脱却して討究することである。それと関わる第二は、高句麗史を当該期の東アジアの史的展開過程と関連させ、巨視的な観点から討究することである。これは高句麗史研究上、必要不可欠である。

その上で看過できないのは、これが高句麗史を「朝鮮史」の一部とみなす日本の伝統的な高句麗認識に対する批判でもあることである。それゆえ、この問題は決して対岸の火事などではありえない。それゆえに、この議論を通して高句麗史研究のみならず、近代歴史学研究への批判的検討、向後の歴史学のあり方を論究する一つの契機、問題提起としてとらえ、克服する方法を模索していく必要がある。

第二部 四六世紀初の高句麗と東アジア

第一章 広開土王代の対外関係と東アジアはじめに

『広開土王碑』には文献史料にみえぬ広開土王代の貴重な対外関係を伝えているが、文献史料とあわせて、広開土王代の対外関係を討究することも高句麗史解明のための重要な課題である。そこで、以下、広開土王代の対外政策を総合的に考究し、当該期の高句麗の対外関係を理解する上での端緒にしたいとおもう。

一. 広開土王代の対後燕関係史料の吟味

広開土王代の対外関係記事は、『広開土王碑』や『三国史記』、中国史料に認められるが、後燕関係記事は繫年・月の相違するものの少なくない。そこで、まずそれら史料について検討してみると、第一に、慕容宝の広開土王冊封は三九六年と考えられること、第二に、麗紀・広開土王九(四〇〇)年正月条の高句麗から後燕への朝貢記事は隆安三(三九九)年一月条癸未(二六日)から同年七月のことと考えられること、第三に、麗紀・広開土王一三(四〇四)年一月条の後燕攻撃記事も二月のこととすべきこと、第四に、麗紀・広開土王一五(四〇六)年一月条の後燕の木底城攻撃は『資治通鑑』の繫年・月に従うべきことが明らかになった。

二. 広開土王代の対外関係

これらをふまえ、改めて広開土王代の対外関係を注視すると、第一に広開土王代の対燕戦が広開土王の治世の半ば永樂一〇(四〇〇)年から永樂一六(四〇六)年にかけて集中的に認められること、第二に、広開土王の積極的な対南方戦略が、おおよそ後燕との交戦状態となる永樂一〇(四〇〇)年から永樂一六(四〇六)年以前とそれ以後に主に展開され、対後燕交戦期、広開土王の積極的な対南方戦が抑制される傾向にあつたことを指摘できる。広開土王の対外政策は、南方・西北方面の動向とも密接に関わつていたのであつた。

三. 広開土王代の対裨麗戦と西北境巡狩

一方、広開土王は最初に対裨麗戦を展開しているが、それは百済との対立が先鋭化するなかで、高句麗西北境の安定を確保するためであつた。広開土王はこれをふまえ、対百済戦を実施する上でも重要な高句麗西北方面の巡撫のため、当該地域を巡狩したのであつた。そして、それをふまえ百済攻撃が行われたのであつた。

また、この裨麗戦の戦果は『広開土王碑』に大々的に刻記されたが、後燕が北方遊牧民への攻撃によつて軍資を得ようとしたように、高句麗のそれもまた来たるべき対百済戦にむけての軍資を得ることも企図されていたのであつた。

結語

広開土王は高句麗西北・南方の動向を見据えながら、外交・軍事活動を展開したが、そうした対外政策はその後も引き継がれていった。その後、高句麗西方の脅威となつたのは北魏であつた。高句麗は西方・南方二方面での戦闘を回避し、朝鮮半島における新羅・百済との対立激化をふまえ、積極的な対北魏外交を展開したが、こうした高

高麗の対外政策の淵源は広開土王の対外戦略に求められるのであった。古代東アジア世界における高句麗の対外関係を探るためには、高句麗西方・南方の朝鮮半島情勢をふまえて総合的に論究する必要があるのである。

第二章 高句麗の対北魏外交と朝鮮半島情勢 はじめに

諸史料には高句麗が四三〇年代から北魏に朝貢を開始し、その後、約二〇年の断絶の後、四六〇年代以後、きわめて頻繁に北魏に使節を派遣したことを伝える。このような高句麗の対北魏外交は、当該期の朝鮮半島情勢を考究する上でも軽視できない。そこで、以下、四六〇年代～五一〇年代を中心に、高句麗を取り巻く状況をふまえて、高句麗の対北魏外交を討究していくことにしたい。

一．四六〇年代以前の高句麗と北魏関係

高句麗と北魏の通交は四三五年から開始される。しかし、翌年、高句麗に亡命した北燕の馮弘の引き渡しを高句麗が拒絶すると、両国の関係は悪化していき、その後、北魏との通交は約二〇年間断絶する。ところが、四六二年以後、高句麗の北魏に対する朝貢は再開されることになる。そこで次にこれについて討究してみたい。

二．四六〇年代以後の高句麗の対北魏外交

四六〇年代の高句麗の対北魏外交転換については、これまでも諸説が提示されているが、必ずしも当該期の高句麗とその周辺諸国との具体的な史的展開過程に即して説明されていない。そこで改めて注目されるのが、『三国史記』や『日本書紀』などに四五〇年代から四六〇年頃、高句麗の従属下にあった新羅が百済と結び、高句麗の軍事的圧力に対抗・排除する動きに転じたこと（以下、これを新羅の脱高句麗化とする）である。高句麗の対北魏外交転換には、この新羅の脱高句麗化が大きく関与していた可能性が大きい。かりにそうであるとすれば改めて問題となるのは、この両国の関係である。なぜなら、通説では五世紀を通じて新羅は高句麗の軍事的影響下にあったと考えられてきたのである。これは高句麗史だけでなく、新羅史においても重要な課題である。そこで、改めて五～六世紀初の高句麗と新羅の関係を論究してみたい。

三．高句麗と朝鮮半島情勢

(一) 『中原高句麗碑』にみえる高句麗と新羅の関係再考

五世紀代の高句麗と新羅の関係を示すものとして注目されてきたのが『中原高句麗

碑』である。問題は碑面の摩滅によって建立時期について定説がないことであるが、既存の研究の批判的検証から、それは四八〇年頃と考えられる。その上で、改めて注目されるのが、同碑には高句麗と新羅の関係が兄弟関係となっており、『広開土王碑』段階よりもゆるやかで、より対等に近いことである。これは新羅の脱高句麗化によってそうせざるを得なかった高句麗と新羅の関係を示していると理解される。

(二) 『魏書』にみえる「新羅」と高句麗・新羅関係

一方、六世紀初の高句麗と新羅の関係を示すものとしてこれまで注目されてきたのが『魏書』世宗紀にみえる新羅である。従来、この新羅を新羅と解釈し、六世紀初まで新羅は高句麗主導で北魏に朝貢したと解釈されてきた。しかし、同時朝貢したはずの高句麗が確認できないこと、『魏書』当該条に対応する『北史』が新羅を西域諸国の一つとすることから、この新羅を新羅とみなすのは困難である。

さらに『魏書』高句麗伝には正始年間（五〇四～五〇八）に、新羅と想定される新羅が高句麗から離脱したことを伝えており、このことから『魏書』にみえる新羅を新羅を見なすことはできない。

このようなことから、新羅は五世紀中ごろから、脱高句麗化を推進し自立していったものと理解され、こうした新羅との軍事的対立と連動して高句麗の対北魏通交は積極的に推進されたと理解されるのである。

結語

四六二年以後の高句麗の積極的な対北魏外交は、新羅の脱高句麗化によって高句麗西・南両方面での抗争を同時に受け止めなくてはならなくなった高句麗が北魏との関係を改善し、その緊張関係を緩和することによって、新羅や百済との抗争を展開させようとした高句麗の外交戦略の一つであったのであった。

第三章 高句麗の対宋外交と東アジア はじめに

これまで高句麗の対宋外交は宋・倭の観点から論及されてきたが、五世紀の東アジア諸国の多様な対外関係を解明するためには、高句麗の観点からの追究も必要である。そこで、以下、高句麗の対宋関係を考究し、東アジア情勢の側面を照射してみよう。

一．高句麗の対北魏外交とその実態―五世紀初頭を中心に―

高句麗の対宋外交を論じるに先立ち、それにも大きく関わる高句麗と北魏の関係を

一瞥してみると、高句麗の対北魏外交は四六二年から頻繁に北魏と通交するが、この間、高句麗は世子入朝を拒否し、北魏の使者に対して不遜な態度で臨み、それを侮慢しており、高句麗の北魏への臣従はあくまでも名目的なものであった。さらに高句麗は北魏との通婚も拒絶しているが、これは北魏と通婚していた北燕が北魏によって滅ぼされたためであった。このように、高句麗は北魏を警戒し続けていたのであった。

二・高句麗の対宋外交

こうした高句麗の対北魏外交をふまえ、高句麗の対宋外交をみてみると、高句麗は対北魏外交断絶期も従前よりも遣使朝貢の頻度は下がるものの、北魏を牽制するためにも対宋外交を展開し、宋との結びつきを強化する外交戦略を採用していた。高句麗と北魏の通交が頻繁となる四六〇年代以後も、ほぼ同じ頻度で対宋外交も展開されており、高句麗は依然として宋との関係を重視していた。これは北魏を警戒し続けていたためでもあろう。

その後、高句麗と南斉との通交は高句麗・北魏の良好な関係を前提として低調となるが、看過しえないのは、五二〇年代の高句麗の北魏領進出期には、積極的に対南朝外交が展開されており、対南朝外交は高句麗・北魏関係の重要局面において、北魏を牽制する上で重要な意味を持ち続けたとおもわれることで、ここに高句麗の対南朝外交の意義が見いだせよう。

結語

五世紀後半、高句麗は北魏を牽制するためにも、宋との関係を引き続き重視したのであった。これは北魏と対峙し、それを封じ込めようとする宋の戦略とも合致していた。それゆえ、宋もまた高句麗を高く評価し、倭や百済より高く位置づけたのであった。

補論 古代東アジア世界における高句麗勢力圏と倭勢力圏 はじめに

四・五世紀、高句麗は倭を敵対勢力として強く意識していた。倭も高句麗を意識し続けた。そこで、ここでは五世紀の高句麗勢力圏をふまえて五世紀の倭の勢力圏形成過程について攻究し、東アジアの史的展開過程の一端を理解する上での端緒にしたい。

一・高句麗勢力圏の構造と東アジア

五世紀の高句麗勢力圏における君主号としては「王」・「太王」・「聖太王」・「好大王」が認められるが、これは高句麗勢力圏のみで通用するもので、高句麗は中国皇帝を頂

点とする国際社会とは異なる独自の支配体制を構築していたのであった。

この高句麗独自の勢力圏を具体的に示すものが『広開土王碑』で、これによれば高句麗勢力圏は中国東北地方・朝鮮半島東北部から朝鮮半島南部の百済・新羅までに及んでいたのであった。

二・高句麗勢力圏と倭・中国

こうした勢力圏には倭や中国王朝が登場せず、高句麗独自の「天」によって権威づけられていたのであった。ただし、高句麗は中国皇帝を頂点とする世界を決して無視していたわけではなく、高句麗はそれを十分に意識しながら、それとは別に独自の勢力圏を構築していったのであった。

三・高句麗勢力圏と倭勢力圏と東アジア―結びにかえて―

その上で注目されるのは、五世紀末の倭王武の治世において倭では、倭独自の「天下」と関わって独自の勢力圏で通用する「大王」号が使用されていたことである。こうした独自の「天」に裏打ちされた勢力圏とそこでの「大王」号という君主号のあり方は、高句麗独自の「天」によって権威付けられた高句麗独自の勢力圏とそこで通用する高句麗の「太王」号とも類似し、倭王は高句麗の独自世界に似せて倭の世界を築き、高句麗に対立・対抗する姿勢を示した可能性が高い。

また、高句麗において一貫して倭が排除されたように、倭においても高句麗が含まれず、倭は高句麗の勢力圏に対抗して、百済や新羅、さらには伽耶諸国も含めた朝鮮半島中南部を含む地域を勢力圏として設定したとおもわれる。

ただし、倭の勢力圏はあくまでも観念的なものにすぎず、現実的には高句麗勢力圏に匹敵しうるような勢力圏の形成はできなかった。そこに高句麗と倭の勢力圏の差違が認められるであろう。そうであったからこそ、倭の勢力圏構築には中国皇帝の権威を必要としたのであろう。

第三部 東アジアにおける高句麗と中国王朝

第一章 集安出土文字資料からみた高句麗の支配体制―府官制再考― はじめに

安岳三号墳や徳興里古墳にみえる墨書をめぐって、これまでそれを虚職とする一方で、高句麗のものと認め、高句麗が中国王朝の官制を導入し、將軍号にもとづいて府を開設したという見解も提示されてきた。これは高句麗の支配体制上のみならず、中

国王朝の影響という観点からも看過しえない。ところが、既述のように墨書の解釈をめぐっては虚職・実職両説が提示され、いまだ鉄案に達していない状況にある。

そこで、本論では、集安で新たに発見された出土文字資料を手がかりに、この問題を論究し、高句麗における中国王朝の影響、支配体制の一端について討究してみたい。

一、壁画古墳墨書の職位に対する先行研究の整理と批判的検討

安岳三号墳には、被葬者・冬寿の職位として「使持節、都督諸軍事、平東將軍、護撫夷校尉、樂浪^四、昌黎・玄菟・帶方太守」(字…推釈した文字、以下同様)が記されており、これらを高句麗のもとみなす見解も提示されているが、「使持節都督」に管轄地域が記されていないこと、墓誌に東晋の年号が示されていることなどから、そのように理解するのは問題である。

徳興里古墳の被葬者・某鎮の官歴「建威將軍・国小大兄・左將軍・龍驤將軍・遼東太守・使持節・東夷校尉・幽州刺史」についても高句麗のものとする見解があるが、幽州の治所が「今の燕国」となっていることなどから、首肯しがたい。

このようにこれら將軍号などは虚職と考えられるが、こうした議論は従来繰り広げられてきた実職か、虚職のいずれがより妥当かという議論に陥る可能性が高い。そこで、集安で新たに発見された文字資料を手がかりとしてこの問題を攻究してみたい。

二、新出文字資料からみた高句麗の將軍について

高句麗旧都・集安千秋塚からは「趙將軍」、「^四將軍」の刻記された文字瓦(以下、將軍銘文字瓦)が発見されている。わずかに二点の断片的な文字瓦であるが、ここに「將軍」が認められることは軽視できない。すなわち、このことは中国王朝においてみられる序列化されていた建威將軍や龍驤將軍などが当時の高句麗には存在しなかったことを示しているのである。したがって、安岳三号墳や徳興里古墳の將軍号も虚職と考えざるを得ず、それを前提とした中国王朝の將軍号の受容や府官による支配も想定できな

三、高句麗と古代東アジア世界―結びにかえて―

以上のことから、五世紀の高句麗において中国王朝の將軍号やそれにもとづく支配体制が、高句麗には認められないことが明らかになった。その上で中国史料にみえる府官をどのように理解できるかということが改めて問題となるが、これも史料上の制約のため、別の観点からの検討が必要である。その場合、注目されるのが君主号である。当該期の高句麗の君主号としては「太王」(『広開土王碑』)、「聖太王」(『牟頭婁墓誌』)

など高句麗独自の勢力圏のみで通用する二次的な王号が確認され、ここから高句麗勢力圏の支配体制が冊封号に規定されていたとはみなせないのである。

とはいえ、高句麗の君主号があくまで「王」であったこと、高句麗自身が中国王朝の官爵号を求めたこと、冊封号を前提とする府官を活用していたことから、中国皇帝を頂点とする冊封号の高句麗における影響を完全に無視できず、それを前提として外交が展開されたことも見落としてはならない。高句麗は中国皇帝を頂点とした古代東アジア世界におけるその重要性を認識していたのであった。

第二章 六世紀前半の華北情勢と高句麗―『韓暨墓誌』の分析を中心に―はじめに

隋人・韓暨の墓誌には既存の文献からうかがい知れない高句麗関係記事が認められる。そこで、以下、『韓暨墓誌』を手がかりに高句麗と北魏関係の一端について考察してみたい。

一、『韓暨墓誌』の状況と釈文

『韓暨墓誌』は縦横およそ五五〇五六センチで、誌文は一部、摩滅のため釈読の困難な部分もあるが、その多くははっきりと確認できる。既存の研究では全文字数を一一八七字とするが、誌文の一部が脱落しており、全文字数は一一八八字である。

二、墓主とその族系

『韓暨墓誌』には墓主の父・韓詳が孝昌年間(五二五―五二七)に、高句麗の北魏侵攻によって高句麗に連行されたとする。これをふまえ改めて吟味すべきなのは、韓詳が高句麗に「連行」されたのか、北魏末期の混乱を避けて高句麗に亡命したかどうかである。後者の場合、墓誌は韓詳の高句麗流入を連行とすることによって、それを不可抗力的なものとしたことになろう。

かりに韓詳の高句麗流入が高句麗の軍事的行為にとまなうものであったとするならば、当該期の高句麗―北魏関係を理解する上で注目すべきこととなる。なぜなら、既存の史料には高句麗と北魏の関係が平和的に推移したとし、そのように解釈されてきたからである。そこで、以下、当該期の高句麗と北魏の関係について改めて討究したい。

三、六世紀前半の高句麗と北魏

高句麗は四六二年以降、ほぼ毎年のように北魏に朝貢を行っていたが、五一九年から五三一年にかけては、それがみえなくなる。この頃、北魏では羽林の乱(五一九年)、

六鎮の乱(五三三～五三〇年)が勃発しており、高句麗の対北魏外交断絶もこうした事態をふまえたものである可能性が高い。こうしたなか、墓誌は高句麗が北魏に侵攻したとする。当該期、高句麗と北魏は必ずしも良好関係であったとはいえず、墓誌の記述はこうした高句麗と北魏の関係を反映したものと理解できる。また、これと関わって、高句麗が当該期に積極的な対梁外交を展開していたことも注目される。これは高句麗と北魏の関係悪化を補完する外交戦術ではなかったかと考えられるのである。

こうしたことから、『韓暨墓誌』にみえる北魏混乱期、高句麗が北魏に侵入したことは十分に想定できよう。『韓暨墓誌』は既存の文献からはいかがい知れない高句麗の北魏侵入を伝え、韓暨はこうした武力侵攻にもなつて連行されたと理解できるのである。

結語

以上から韓暨は北魏の孝昌年間(五二五～五二七)に高句麗の北魏侵入によつて、高句麗に連行された人物であることが明かになった。『韓暨墓誌』は既存の文献史料にはみえぬ六世紀前半における高句麗の動向を伝えており、高句麗史研究上の『韓暨墓誌』のもつ意義はきわめて大きいのである。

第三章 『裴遺業墓誌』と高句麗—五七〇年代の北齊・高句麗関係の一齣—はじめに

二〇二二年、王其禕・周曉薇「新出北齊聘高麗使主《裴遺業墓誌》疏証」(『北方文物』二〇二二年二期)において、裴遺業の墓誌が紹介された。この『裴遺業墓誌』には現存の文献史料にはみえぬ北齊・高句麗関係記事が認められるという。残念ながら当該墓誌の所蔵先は不明で、墓誌の実見にもとづく調査は不可能であるが、幸い同論文には墓誌の拓本が掲載されており、それにもとづいて墓誌の研究を進めることが可能である。そこで、以下、『裴遺業墓誌』からうかがえる五七〇年前後の高句麗・北齊関係の一端を明らかにしたいとおもふ。

一・『裴遺業墓誌』の釈文と裴遺業一族

『裴遺業墓誌』は山西省襄汾県永固郷から出土し、それによれば墓主である裴遺業は北齊の官人で、開皇二〇(五九〇)年八月二十七日に六三才で死亡したという。

二・『裴遺業墓誌』からみた北齊・高句麗関係

『裴遺業墓誌』高句麗関係記事は一三行目から一八行目にかけて記されており、裴

遺業の高句麗外交における活躍が、彼の業績を示す上で特段に重視されたのであった。

高句麗・北齊関係において、この墓誌の重要性の第一は、文献史料が伝えぬ五七〇年の北齊から高句麗への使節派遣を伝えることであり、第二は北齊から高句麗に派遣された使節の名前、彼が帯びた官職が具体的に確認できることである。ここから北齊の対高句麗外交の位置づけの一端をかいまみることができるのである。

(一) 五七〇年の北齊の対高句麗外交

裴遺業は高句麗派遣に際して員外散騎常侍(正五品上)を授与されたが、それは対北周、梁・陳使者の帯びた官職よりも低く、ここから当該期の北齊の対高句麗外交の位置づけが対北齊・対南朝外交よりも低かったことを看取できる。これはこの頃の兩國の関係悪化を反映していたともいえる。ただし、北齊が必ずしも対高句麗外交を重視していなかったとはいいきれず、それは北齊から裴遺業が高句麗に派遣されたこと自体、そうした側面を示しているといえよう。

(二) 五七〇年代の高句麗・北齊関係

墓誌は裴遺業の功績を前漢の陸賈・張騫と比し、彼らに勝るとも劣らぬものと高く評価するが、これは裴遺業の業績を頌徳するためでもあったが、このことが特記されたのは、兩國の関係が悪化しており、裴遺業の任務も困難を伴うものであったにもかかわらず、裴遺業の対高句麗外交上の功績が高く評価されたからであった。

(三) 五七〇年代の高句麗の対北齊外交と『裴遺業墓誌』

ただし、裴遺業の高句麗派遣によつて兩國の関係がただちに良好となった、と理解するならば、それは性急のそしりを免かれない。なぜなら、史資料にはさまざま高句麗から北齊へ使者が派遣されたことを確認できないからである。では、対高句麗外交で功績をあげたとする墓誌の記述をどのように理解すればよいのであろうか。

『北齊書』によれば、五七三年に八年ぶりの高句麗の朝貢が伝えられている。裴遺業の外交努力がこの武平四(五七三)年の高句麗の北齊入朝をもつて実現したわけである。裴遺業への建節將軍授与は、まさにこの年のことで、両者が無関係であったとは考えがたく、高句麗の遣使入朝をうけてのものであったに相違ない。

このように墓誌は五七三年の高句麗の北齊への遣使入朝を、裴遺業の功績として高く評価するが、高句麗からすれば、敵対する新羅・百濟の北齊との結びつきを牽制するためのもので、高句麗の北齊への遣使朝貢を裴遺業の功績にのみ帰すわけにはいかない。その限りにおいて『裴遺業墓誌』には誇張があったとみるべきであろう。

小結

このように新たに紹介された『裴遺業墓誌』は、既往の文献史料からはうかがい知れない高句麗・北斉関係の一面を伝えるのであって、そこに『裴遺業墓誌』の高句麗史研究上の意義が認められるのである。

第四部 高句麗の対倭外交と東アジア

第一章 五七〇年代の高句麗の対倭外交と華北情勢はじめに

高句麗と倭の関係については、これまで主に文献史学や考古学、美術史によって日本史の観点から追究されてきたが、ひるがえって高句麗の視点から論及することも必要であろう。そこで、本論では改めて高句麗の対倭外交開始とその事情について、当該期の高句麗を取り巻く諸情勢をふまえてつつ考究する。

一・欽明紀以前の高句麗遣使記事の批判的検討

高句麗と倭の初めての通交を示す記事として、少なからぬ研究者が継体紀一〇（五一六）年秋九月条に注目する。しかし、五七〇年に高句麗使節が始めて倭に到達したことに比べて記事が簡潔にすぎること、欽明紀が継体紀の高句麗使節到達を無視していることなどから、そのように理解することはできない。

こうしたことから高句麗の対倭外交を伝える記事は、高句麗使節が「始めて越国に到」ったとする、欽明紀三一（五七〇）年四月条をもって嚆矢とすべきであろう。

二・五七〇年代の高句麗の対倭外交についての既往の研究

この高句麗の対倭外交の開始の理由としては、主に新羅の伸張や対南北朝外交が指摘されてきた。新羅の動向は高句麗の対外政策を理解する上で無視できないが、既存の研究では高句麗と新羅の関係のみが注視され、北朝との関係などについては考慮されず、それをふまえて多角的に議論されてこなかったといえる。そこで、改めて当期の北朝の動向、高句麗との関係をふまえ、高句麗の対倭外交開始の原因について論究してみたい。

三・高句麗の対倭外交と北朝

(一) 陽原王代の高句麗外交と北朝

高句麗は東魏以後、北斉建国初期まで、積極的に遣使朝貢し、西方和平策を採っていた。ところが、五五三年の北斉の漢人返還事件以後、高句麗の遣使朝貢は激減し、

高句麗・北斉関係はそれ以前に比べ悪化していったのであった。

(二) 五七〇年代の高句麗の外交と北斉

この両国の関係悪化はその後も続く。その頃、対立する北斉は新羅を高く評価しており、高句麗の北斉に対する警戒心は、より強まっていった。また、新羅の伸張によって、高句麗は大きく後退せざるをえなくなっていた。さらに、この時期、北斉と北周の対立も激化し、しかもそれは高句麗が警戒していた北斉優位で展開していった。

(三) 五七〇年代の高句麗の対倭外交と華北情勢

こうした状況に加えて新羅が陳との外交を開始する。これによって高句麗は北斉、新羅との対立に加え、新羅と陳との通交によって、外交的危機に陥る。こうしたなか、五七〇年に倭に高句麗の使者が到達する。これは国際的孤立を打破するために、高句麗が対倭外交を推進した結果であり、倭との提携によって新羅を牽制しようとした外交戦略にもとづくものであった。その後も高句麗から倭へ使節が派遣されるが、北斉が衰退し、高句麗への脅威が減退すると、高句麗の対倭外交は一時頓挫する。北斉の衰退・滅亡によって、高句麗の対倭外交の意義も低下していったのである。一方、新羅との対立はその後も継続するが、高句麗の対倭外交は認められない。このことは高句麗の対倭外交における最大要因が北斉との対立であったことを示している。事実、高句麗は北周・隋へ使節を派遣し、西方の安定を希求したが、その間、対倭外交は認められないのであって、それが再開するのは隋との関係が悪化してからであった。

五七〇年代における高句麗の対倭外交は、新羅との対立を大前提としつつ、北斉との関係悪化が極めて大きな影響を及ぼしていたのであり、ここに華北の状況と密接に関わって展開された高句麗の対倭外交の特徴が認められよう。

では、この時、高句麗使節が持参し、烏の羽に書かれたとされる難解な国書は、どのような高句麗外交と関わってどのように解釈できるのであろうか。この国書の性格を理解する上で何よりも重要なのは、これが高句麗を取り巻く厳しい国際情勢のなかで倭に送られたものであったということである。それゆえその内容は倭に伝えられねば意味がなかったはずである。高句麗はすでに中国王朝との外交において外交文書を活用しており、倭もまたしかりであった。このことを勘案すれば、高句麗が外交上の国際的言語であった漢文を用いず、わざわざ判読困難な高句麗独自の漢文を利用して、国書を作成する必要があったのかどうかは大いに疑問の残るところである。「烏の羽」

に国書が記されたとするのも同様である。高句麗の国書の性格を伝える敏達紀の記述は、やはり王辰爾を頌徳するものとして理解すべきなのである。

第二章 六世紀末から七世紀半ばの東アジア情勢と高句麗の対倭外交はじめに

六世紀後半から七世紀後半まで、高句麗は倭と積極的に通交したが、これについてはこれまで日本古代史の立場から論じたものがほとんどで、高句麗の観点から論究されたものは必ずしも多くない。そこで、以下、改めて六世紀末から七世紀半ばまでの高句麗の対倭外交を高句麗の視点から論究したいとおもう。

一・五九〇年代の高句麗の対倭外交

五九五年、慧慈が来倭したが、これは隋との関係悪化をふまえ、国際的孤立状況下において高句麗は倭との結びつきを強め、新羅・百済を牽制しようとしたためであった。その後も高句麗は仏教・僧侶を媒介とする対倭外交を推進した。高句麗は対倭外交を成功・促進するために、高句麗は高句麗系僧侶を派遣し、彼らを通して、倭国内における高句麗の位相を高め、親高句麗的な政策を実行させようとしたのであった。ただし、その後の隋の高句麗遠征時に、高句麗から倭への使節派遣は認められない。それゆえ、高句麗の対倭外交を、高句麗・隋の緊張関係のみから説明するのは困難である。そこで、以下、高句麗の対倭外交を高句麗を取り巻く諸情勢をふまえ考究してみよう。

二・六〇〇年代初の高句麗の対倭外交

七世紀初、倭から高句麗に派遣された使節が遣百済使とともに帰国しており、そこから高句麗と百済は同盟関係にあったという見解とともに、それに批判的な見解も提示された。これは高句麗外交を理解する上で重大な問題である。そこで、これを攻究するために、あらかじめ当時の高句麗を取り巻く状況をみてみると、高句麗は隋と緊張関係にあり、外交的孤立を避け、新羅を牽制するためにも倭との関係を深めようとしていた。高句麗の対倭外交は対隋、対新羅関係と関連しながら展開していたのであった。では、これをふまえて百済との関係はどのように理解できるであろうか。

三・七世紀初の朝鮮半島情勢と高句麗の対倭外交

高句麗と百済の関係を理解する上で看過できないのは、『隋書』に高句麗と百済が内通していたとすることである。当該期、倭国において両国の僧侶がともに活動して

おり、また、両国も対新羅政策のため、倭とそれぞれ通交していた。『隋書』の記事はそうした状況をふまえ、百済が倭を媒介として高句麗に内通していると誤認されたものを反映したものと推察される。両国は対新羅戦略では利害を一致させていたものの、当該期、この二国が必ずしも同盟関係にあったとは解釈できない。三国の抗争に唐が仲裁していることから、そのことを間接的に示しているといえる。

こうしたなかで高句麗の対倭外交は、隋との緊張関係をふまえたつとも、直接的には対新羅戦略を中心とする朝鮮半島情勢と関わって展開されたのであった。

四・唐建国初期の高句麗の対外関係と対倭外交

その後、中国では隋に代わって唐が建国されるが、高句麗は対倭外交を重視し、他倭外交は低調であった。しかし、この頃、高句麗の対倭外交使節は従前の僧侶の派遣から大使・小使からなる使節団の派遣へと変化した。これは仏教に依拠せざるをえなかった高句麗の対倭外交の進展を示唆しており、高句麗は新羅との抗争をふまえ、倭との通交によって新羅を牽制しようとしたのであった。

五・六三〇年代・六四〇年代初の高句麗の対外関係

六三〇・六四〇年代、高句麗は唐の積極的な軍事活動を見据えつつ、対唐外交を展開し、対倭外交は低調であった。しかし、六四二年、泉蓋蘇文によるクーデターが勃発すると、高句麗と唐との緊張関係は強まっていき、新たな様相をみせることになる。六、六四二年～六六八年までの高句麗の対倭外交

高句麗は六四三年、これは唐との対立をふまえ、倭との関係を強化し、新羅牽制を期待すべく、対倭外交を展開した。しかし、新羅から高句麗への脅威が軽減すると対倭外交の比重も相対的に低下し、しばらく高句麗の対倭外交は低調となる。

ところが、六五六年以後、高句麗は新羅・百済の対倭外交に対抗して大使節団を倭に派遣し、対倭外交を進展させる。唐との交戦下にあつて、倭との連携を強め、倭の軍事活動によって新羅を牽制することを高句麗は期待したのであろう。

六六〇年に百済が滅亡すると、高句麗の対倭外交はより重視され、六六六年には二度わたつて高句麗使節が倭に到達した。外交的孤立や軍事的苦境に対処するためにも倭との関係強化が図られたのであった。しかし、六六八年、高句麗が滅亡し、高句麗の対倭外交も終焉を迎えたのであった。

結語

六世紀末から七世紀の高句麗滅亡までの高句麗の対倭外交について、既往の研究で

は隋・唐との関係のみが強調されてきたが、それは対隋・対唐外交・対立を前提として、朝鮮半島における新羅・百済との抗争、それに二国の対倭外交などをふまえて展開されたのであった。西方の隋・唐という大国と南方の新羅・百済との対立・同盟関係などさまざまな要因がまいて、高句麗の対倭外交が展開されたのであって、ここに高句麗外交の特質の一端が看取され、古代東アジアの視点から高句麗外交を追求する理由が認められる。

第三章 高句麗遺民と新羅―七世紀後半の東アジア情勢― はじめに

『日本書紀』には高句麗滅亡後の高句麗使節の来倭を伝えている。これをめぐっては唐に抵抗運動を展開した高句麗遺民、安東都護府下の高句麗遺民、新羅領内に設置された小高句麗国から派遣されたとする見解が早くから提示され、現在もなお定説をみない。しかし、これは高句麗遺民だけでなく、唐や新羅を含む東アジアの史的展開過程を解明する上でも軽視できない問題でもある。そこで、改めて高句麗使節の日本派遣について討究し、七世紀後半の東アジアの史的展開過程を解明する端緒にしたい。

一・高句麗遺民の反乱と高句麗王安勝

(一) 高句麗王安勝の出自再考

唐への抵抗運動を展開した高句麗遺民たちは安勝を推戴するが、この安勝は彼の父・淵浄土が「高句麗貴臣」であったことに因み、当初、「国の貴族」とされ、高句麗遺民による推戴後、宝臧王との関係を誇示し、高句麗君主としての正統性、権威を示すため宝臧王の外孫として強調された。その後、新羅からの冊立過程で「高句麗嗣子」「先王正嗣」として位置づけられ、高句麗王の正統なる継承者とされたのであった。

(二) 安勝と新羅―安勝の新羅逃亡記事の再検討

一方、この安勝が新羅へ逃亡する記事が『三国史記』にみえるが、新羅本紀と高句麗本紀では繫年が異なる。これは高句麗本紀の高句麗遺民関係記事編纂過程において『資治通鑑』が優先され、本来、新羅本紀に対応すべき記事が挿入されず、その一年前の高句麗遺民の離叛者の記事のなかに安勝の新羅逃亡記事を挿入したためであった。安勝は新羅から迎えられたものの、六七〇年に高句麗遺民四千余戸とともに新羅に逃亡したのであった。

二・高句麗遺民の反乱と新羅・唐

(一) 高句麗遺民の反乱と新羅と安東都護府

新羅の援助のもと、高句麗遺民の反乱が勃発したが、これは高句麗遺民を積極的に支援し、それによって唐の軍事的介入を阻止することを期待した新羅の戦略によるものであった。この反乱は遼東にまで拡大し、唐軍は鎮圧軍を派遣せざるを得なくなったのであり、唐の軍事を分散させようという新羅の思惑通りになったのであった。

一方、新羅は安勝を高句麗王に冊立したが、これは安勝を高句麗王とし高句麗遺民を安撫することによって、高句麗遺民支援の姿勢を示すことが必要であったため、こうして新羅領内に高句麗が復興したのであった。

(二) 高句麗遺民の反乱と唐

高句麗遺民の反乱の鎮圧を目指した唐軍は六七二年の平壤進出後、さらに朝鮮半島中部まで駒を進め、高句麗遺民・新羅軍を破り、その余勢を駆ってさらに南下する。しかし、新羅軍が主力となって唐軍を撃退し、高句麗遺民に代わって、今度は新羅が唐との対立の表舞台に登場することになった。六七〇年に勃発した大々的な高句麗遺民の反乱は、六七三年閏五月の戦闘をもってひとまず終焉を迎えたのである。

三・高句麗遺民の対日本外交と新羅

(一) 高句麗遺民の反乱と高句麗遺民の遣日本使

このように高句麗遺民の反乱のさなか倭に到達した、六七一年の高句麗使節をめぐっては既述のように諸説が提示されているが、それらは全くの根拠なき推論にすぎない。しかも、新羅が高句麗使節を偽称していた可能性もある。ここから一つに特定するのは極めて困難で、今のところ、決定打を欠くといわざるを得ない。

ただ、いずれの場合も新羅が援助していたことは明らかであるため、視点を変えて、高句麗使節の日本派遣における新羅の関与に注目し、この問題を攻究してみたい。その場合、看過できないのは高句麗遺民の抵抗運動中には新羅送使が随伴されていないのに対して、その後は認められることである。新羅は高句麗使節を前面に出すことによって、唐への抵抗運動を展開する高句麗遺民の支持を得、日本と唐との連携阻止、新羅への唐の軍事的圧力軽減を図ったのであり、高句麗使節の日本派遣は、新羅にとっても重要であった。

(二) 小高句麗国の遣日本使派遣と新羅

高句麗遺民の反乱鎮圧後の高句麗使節についても、新羅の偽称の可能性があるが、「高麗王」が使節を派遣したとすること、小高句麗国滅亡後は認められなくなること

からみて、小高句麗国からのものと理解してよい。そして、これら使節派遣の前後には例外なく新羅使節の派遣が認められ、高句麗使節の派遣は新羅の対日外交と連動して行われていたのであった。こうしたなかで新羅は新羅送使を随伴させたが、これは新羅の影響下に小高句麗国が復興したことを日本に明示することによって、引き続き日本の高句麗遺民、さらにはそれを擁する新羅への援助を期待し、それによって唐と日本との連携を防止し、新羅支援を得ようとしたからであろう。

このように高句麗使節に新羅送使を随伴させ、それが新羅の影響下にあることを日本に示すことは、新羅の対日外交上、新羅にとつてきわめて有効な外交的手段であったのであった。新羅は唐との対立という未曾有の危機的状況下で高句麗遺民の遣日本使を積極的に活用したといえる。

結語

このように新羅は高句麗遺民の抵抗運動、高句麗使節の対日外交に積極的に関与したのであった。新羅はかつて「任那」使節を偽称し、対日外交を優位に展開しようとしたが、高句麗滅亡後は、高句麗の遺民がかつての「任那」使節の役割を担い、新羅の対日外交に利用されたのであった。新羅は対日外交における高句麗使節の日本派遣の重要性を十分に認識していたのであり、ここに高句麗遺民に対する新羅の影響を軽視できない理由があるのである。